マスター to アーティスト

【第3回】

＜そのドキドキには理由がある＞

長江和哉

音楽文化創造学科
サウンドメディアコース専任講師

1973年（昭和48年）、愛知県生まれ。
1996年 名古屋芸術大学音楽学部声楽科卒業後、録音スタジオ勤務、ラジオ番組制作会社勤務等を経て、2000年に録音制作会社を設立。2006年より名古屋芸術大学音楽学部音楽文化創造学科 専任講師
両親は合唱で知りあい結婚、祖父はラジオ技師と、レコーディングエンジニアにふさわしい家庭環境で育つ。自身も幼少から常に傍らに音楽のある人生を歩む。さまざまなアーティストのアルバム制作にエンジニアとして参加、活躍中。

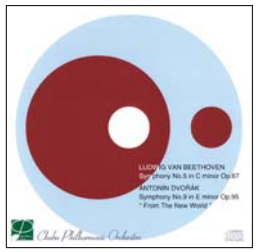
東キャンパス２号館、レコーディングスタジオのコントロールルーム。スポットの当たる中に、ところ狭しと無数のスイッチが並ぶミキサーが構える。「このコンソールは、ＳＳＬの4000Ｇ＋というものです。10年ほど前までは、テープに録音していたのですが、現在は、このコンピューターのハードディスクに録音しています」。
「Macの『Pro Tools』というソフト。以前は、スタジオでなければしっかりとした録音をするのは不可能でしたが、このPro Toolsが普及してからは、アーティストの家で録音した音源をＣＤにすることが可能となりました。但し、充分な知識が必要となります」。人好きのする笑顔と表情が、その場の空気を穏やかにする。

レコーディングエンジニアという仕事。音楽を愛好する人にとっても、ＣＤやレコードの制作に関心がなければ、その存在に注意を払うことは少ないのではないだろうか。

ドイツに赴き、特別客員教授、エバーハルト・ヒンツ先生の録音に立会い、大いに刺激を受けた。いくつもの写真をモニタに映し出すと熱心に言葉を繰り出す。「ベルリン芸術大学へ視察にいってきたんですけど、サウンドメディアコースはこの学校にあるトーンマイスターコースというのをモデルに作られています。ドイツは、昔から音大の中に、トーンマイスターコースがあってエンジニアを養成しているんです。楽譜を読む練習をして、ピアノも弾けて、聴音の訓練もして、電気工学を勉強して、具体的な録音も勉強して…と。録音セッションに３日間参加したんですけど、ヒンツ先生がディレクター兼エンジニアなんですよ。そこでは、この人のいうことは絶対なんです。もう一回テイクを録ろうとか、ここが悪いから直せとか、で、皆言うことを聞くんですよ。映画でいうと監督が自分でカメラ回してるという状態ですね」。トーンマイスターは、マイクを通した音楽という場合においては、その位置付けは指揮者以上といえるかもしれない。「第２の指揮者ですね。場合によっては指揮者よりも偉い」。

『FANTASY』　栃本浩規

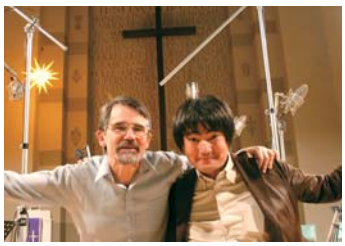
本学11期卒業生のNHK交響楽団トランペット奏者 栃本浩規さん（本学非常勤講師）の待望の1stアルバム「FANTASY」のレコーディングを担当。



中部フィルハーモニー交響楽団 新楽団名披露コンサート

それまでの「小牧市交響楽団」から「中部フィルハーモニー交響楽団」に名称を変更した際に行われた新楽団名披露公演のライブレコーディング。

特別客員教授　エバーハルト・ヒンツ先生の録音に同行するためベルリンへ。トーンマイスターユースがあるUdKベルリン芸術大学を訪問。多くの学生がレコーディング作業をしていた。



世界中の録音現場で使われているマイク「NEUMANN（ノイマン）」の本社。

教会でのレコーディングの様子

デジタル技術の発達は、音楽の編集を可能にした。ポピュラー音楽のCDで、Vocalを修正してあることは周知の事実とも言えるが、オーケストラでも状況は同じ。ドイツでは、トーンテクニックという肩書きがオーケストラの一員としてクレジットされるという。

翻って日本の状況で、エンジニアにできることを考え仕事に向かっている。「ディレクターの意図、演者の意図、あとはそれを聞く一般の人がどう要求するのかを制作者は、よく考える必要があります。それらは誰も言ってくれないですからね、自分で察していって最終的にいい結果を残す。これが大事なことだと思います」。

「技術的なスキルを勉強することも大事なんですが、その背景にあるものを考えることが大事だと思うんです。聴いてドキドキするものを作るには、まず自分がドキドキしなきゃいけない。作っている人がドキドキしなければ、お客さんはそうはならないと思いますからね。そして、そのドキドキは、何がそういう要素なのか分析すればわかることだと思うんですよ。なぜドキドキしたかを考えて、そういう要素を自分のアイデアとしてとり入れていかなきゃいけないと思うんです」

エンジニアには「芸術家じゃない部分がある」と謙遜するが、強い信念が垣間見えた。

音楽の制作現場について

音楽制作、ことにCDやレコードの制作には、演者以外にも様々な役割の人々が係わる。演奏するスタジオや必要な機材、人員、バジェットのマネジメントを行うプロデューサー。音楽の方向性を決め現場を取り仕切るディレクター。そして音響と技術の専門家であるエンジニアがその代表である。日本の場合、プロデューサーは、レコード会社の編成部長といった場合が一般的であり、音楽を専門的に学んだ人は少数であった。またエンジニアについても、その名の通り、技術が専門で音楽的な素養がなく、楽譜すら読めない場合が多かった。そんな因習を引き継いでか、エンジニアは、こと音楽の内容についてプロデューサー、ディレクター、演者に意見を述べることはごく稀である。いい音で録られた音楽には、広い音楽の知識と素養を持ったエンジニアが関与しているという事実が広まるにつれ、音楽性の豊かなエンジニアが必要とされるようになってきている。